

俳句作法ノート・シリーズ第五卷

平井洋城

俳句作法セニソ

近代文藝社

俳句作法セミナー

俳句作法ノート・シリーズ第五卷

平井洋城

江苏工业学院图书馆
藏书章

近代文藝社

著者略歴

ひらい ようじょう

平井洋城（平井 洋）

大正7年3月千葉県習志野に生まれる。本籍 山口県。

昭和18年 豪北の戦野にて俳句をはじめ。

俳人協会会員。山口県詩人懇話会会員。

著書『アラフラの海まばゆかり』（一橋出版社）『俳句作法ノート』シリーズ四巻（近代文藝社）句集『あらせいとう』（潮流社）『遊年』『薺爪』（俳人協会）詩集『砂金』（潮流社）『濡れた太陽』（近代文藝社）随筆・俳論集『蒼いポシェット』（芳山印刷）

現住所 〒167 東京都杉並区清水3-22-23

電話 03-3390-4238

俳句作法ノート・シリーズ第五巻

俳句作法セミナー

1994年6月10日 第1刷

著者 平井 洋城

発行者 福澤 英敏

発行所 鑿近代文藝社

〒112 東京都文京区目白台2-13-2

(03)3942-0869 Fax (03)3943-1232

定価 1800円（本体 1748円）

印刷 信毎書籍印刷株式会社

製本 小泉製本所

©1994 Printed in Japan

ISBN 4-7733-2383-3 C0092 P1800E

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

技術と感性（序にかえて）	5
俳句の骨法	9
中七で切る	11
冗語について	17
小主観は述べない	24
常套表現は避ける	29
固有名詞はなるべく詠まない	35
「もの」で勝負する	41
即くということ	46
外来語表現について	51
うごき・瞬間を詠む	55
意外性を詠む	61

見せ場を創る	66
離れてつかむ	71
詩感・詩因とは	75
俳句の技法	81
平明深奥	83
動詞を重ねる	88
重ねことばの用いかた	92
他動詞的詠法	98
省略法としての名詞どめ	102
色彩 いろ を詠む	108
「見る」を詠む	115
空間を詠む	125
ゆつくり詠む	130
ぼんやり詠む	136
只ごとを詠む	142
当りまえに詠む	148

危うきに遊ぶ	155
ことばを練る	161
俳へのあそびかた	167
俳論断章	173
ファジーな俳句	175
俳句の諷刺性	180
俳句の無頼性	187
俳句の狂気性	192
言語空間を娛しむ	197
取り口に合った句	202
スランプ脱出法	207
私の作句工房の一端	211
あとがき	215

技術と感性

——序にかえて——

受贈した「未央」九二年十月号の「未央論壇」に松岡ひでたか氏の「技術先行への警告」というエッセイが載っていた。氏は稲畑汀子と古館曹人のことばを、技術先行傾向の顕著な現在の俳句界に対する警告として受け止めるべきであると述べている。そのことばとは、

「上手な俳句、つまり言葉の綾とか表現方法とかに凝った俳句はありますが、作者の感動が伝わってこない俳句が多いですね」（汀子）

「俳句上達の秘訣は俳句の技を練磨するという作句上のことではなくて、まず作家の心の側、すなわち人間そのものの修練にある」（曹人）ということばに集約される。

しかし、これらのことばは、ある水準に達した俳人には通用しても、いい俳句を作ろうと懸命に努力している人たちにとってはいささか迷惑な警告ではなからうか。

汀子の言う感動の湧くのを待っていたのでは、吟行では一句もできないことがある。

また、人格では、心だけでは絵は描けない。絵を描くのにまず「感動を先行させろ」、「人格をみがけ」と言っても、初学者にはどだい無理なはなしである。絵の基礎はなんといってもデッサンである。写生にはデッサンの技術が要る。

俳句の生命である「発見」にしても、人格や感動からは生れてこない。科学的発見にしてもおなじこと、技術の練磨の積みかさねの上にはじめて「発見」が生まれる。

俳句では感動は一見無感動な「突きはなした詠みかた」の中で表現されるもので、感情は殺した詠みかたをする。感動をじかに表現したのでは「ああ松島や松島や」になってしまう。

「感動」をキャッチするのは感受性であり、詩的感性である。筆者は、俳句上達の秘訣は「技術と感性の練磨」にあると断言してはばからない。

基でもそうだが、「定石」を知らぬ者はいくら力があつても高段には達し得ない。作句の基礎的技術は「定石」のようなものである。俳句がうまくなろうと思えば、ひたむきに技術を練磨しなければならぬ。

ところが「俳句は自得の文学である」と言つて、技術をことこまかに教えない職人かたぎの風潮が俳界にはある。作句技法はもつともつと公開されるべきである。添削指導だけでは作句の法則性は見出せない。

感性の練磨のためには、筆者はいい詩を読むことをおすすめする。自ら作るようになればさうによい。「俳人は詩人たるべし」とは筆者の持論である。また『秀句を沢山読む』ことをおすすめする。

曹人が「作家の心の側すなわち人間そのものの修練」と言つたのは、『感性の修練』、『個性、人間性のにじみ出る作句修練』ということばに受けとめたい。「青門」九二年十月号の「野田

別天楼子の応答文」はたいへん参考になる高木青二郎主宰のエッセイであるが、将来歓迎される句の要件として、すでに昭和九年に別天楼が『作者の個性の發揮せられた句』『選者の鑄型に嵌^はまらない句』『何派とか何流とかの拘束から超越した句』等々を挙げているのは、まことに慧眼であると言わざるを得ない。

しかし、はじめから個性的な句は作れるものではない。

「教育は模倣にはじまり創造に終る」とは姫高（旧）恩師多田斉司教授のことばである。秀句を沢山読み、できれば詩も読んで感性をみがき、技術をみがき、模倣的なものから個性的、創造的作句へ踏みこめるよう飛躍することが俳句上達への道である。

俳句の骨法

中七で切る

蠅叩手から離さず老船医

金房 晴峰

筆者の会社先輩の作である。中七で切ったところがよい。初学者はおおかた

蠅叩き手から離さぬ老船医

とやってしまう。これでは散文となり、説明となってしまう。中七で切ればよいものを、切らず連体形でつなぎ散文としてしまう例はゴマンとある。筆者が関係、もしくは指導している句会の実作から抜いてみよう。

おしろいに夕風の立つ無人駅

「夕風たてり無人駅」と切らなければならない。

葛の葉の風吹きやまぬいくさ跡

「風吹きやま^ず古戦場」と力強く切るべきである。

風鎮のほのかに揺るる秋座敷

風鎮とは掛軸が風に吹かれてひるがえるのを防ぐために、軸の両端にかけるおもりのことである。秋風を言わないで秋座敷の季題を幹旋したところは手柄であるが、「風鎮のほの揺れいたり秋座敷」として中七で切り、句のひろがりを出したほうがよい。原句では説明になってしまつて広がりがない。

玉音の重きしじまの敗戦日

「重きしじま」の措辞はうまいが、中七で切っていないのが惜しい。

玉音の重きしじまや敗戦日

とすれば句がびしりと締まる。

夕焼を飲みつくしたる秋の海

雄大な構図ではあるが、「夕焼を飲みつくしたり秋の海」と中七で切れば説明にはならない。「飲む」は「呑む」でなければならない。ことばひとつにも俳人はデリケートな配慮を怠ってはならない。

樹頭のみ紅葉してゐる十二月

「樹頭のみ紅葉してをり天子の日」とすれば説明を脱し、さらに「天子の日」によって、句に象徴性が生まれる。「十二月」の季語を据えたのでは説明まるだしとなる。

廻りいることが悲しき走馬燈
七輪に湯が沸いてゐる年の市

前句は「悲しや」と中七で切る。後句は「沸いてをり」であろう。

残照にしがみつきたる冬の蜂

「しがみつきたり」

髪長き女の歩るく敗戦忌

「女ゆきけり」

夕化粧きままに咲かす寺男

「きままに咲かし」

終戦を待たで散りたる沙羅の花

「散りたり」

かぞえあげれば切りもないが、一物仕立ての句で中七切れにしないで、うっかり連体形や連体修飾語でつづけて散文としてしまっている人が意外に多いのではなからうか。

囚人が拓きし道に鳥かぶと

「かつらぎ」 同人の作であるが、「に」は場所を説明してしまっている。